

暮らす ◎この歳、いい歳◎

【エピソード】

いさおさんは、71歳、はるさんは72歳。二人の出会いは、3年前の秋。はるさんがはじめて、投句していた俳句雑誌の定例会に出席した日からはじまりました。いさおさんはその俳句雑誌の編集を担当する同人でした。俳句をはじめて年数の浅いはるさんにいさおさんはていねいにアドバイスします。句会のあとなど、お茶を飲んだり、食事をしたり、二人はゆっくり、ゆっくり、お互いを知ること努め、できるだけ一緒に過ごす時間をつくってきました。



いさおさんから「結婚して欲しい」という言葉を聞いたとき、はるさんは驚きました。「この歳で結婚なんて」と、及び腰のはるさん。でも、いさおさんは、現在一人で暮らしている家を増改築して、俳句仲間の二組の夫婦と一緒に住むという計画を立てていました。いさおさんとはるさんを含めて三組の夫婦が、共有するキッチンや居間を中心にして、それぞれ独立性をもったスペースに暮らそうというのです。バリアフリーの設計にすると融資が受けられるけれども、この年齢では多額のローンを組むのは苦しい。それは、あとの二組の夫婦も同様でした。それなら、気心の知れた俳句仲間と共同で出資し、一緒に暮らせば、何かにつけ負担を減らせるということになったのです。三度の食事づくりは当番制にしたら手間が省けるし、時間の余裕や食費の軽減につながる。各自が購入している俳句雑誌や俳句関係の本なども、一冊で足りる。それに、体調を崩すようなことがあっても安心だ。そんな計画を聞いていると、はるさんは老後だと思っていた自分の暮らしが、急に生き生きとしたものを感じられるようになりました。いさおさんは早くに連れ合いを亡くし、子どもたちを独立させたあとは、一人で生活してきたのですが、そんなところにいさおさんの自立した発想の根っこがあるのかも知れないと、はるさんは思っています。

しかし、今のところ、二人の結婚にはいさおさんの子どもたちも、はるさんの息子も反対しています。

「結婚なんて、いい歳をして世間体が悪い。茶飲み友達せけんていのままでいいじゃないか」

「自宅を増改築して、他人と住むなんて。おやじが先に死んだら、その家はどうするつもり？」「亡くなったじいさんがかわいそうや。墓はかはどうする気や？」

いさおさんは、「この歳だからこそ、残りの人生をはるさんと過ごしたい」と考えています。二人の時間は、はじまったばかりです。

対話の
ために

- 高齢者の恋愛や性について、あなたはどのように思いますか？
- あなたが高齢者になったとき、どんな風に暮らしたいですか？

はるさんのひとりごと

亡くなったおじいさんは、^{にんちしやう}認知症の^{ちやうこう}兆候がでてきてまして、朝も昼もない生活でした。それから夜中にどこかにいってしまつて警察の人に連れて帰ってもらうこともたびたびでした。大騒ぎしたり、私の言うことも少しもわかつてくれず、しまいには、私がだれなのかもわからなくなり、大暴れして大変でした。^{しつじん}失禁もありました。あまりに私のことをひどく言うし、おもらししたときは思わずおじいさんのおしりをちょっとつねったりしたこともありました。世話をしていた私は、もう身も心もくたくたで、自分も体を悪くしてしまい、とうとう入院することになりました。おじいさんは、そこでなくなりました。最後まで面倒みることができなかつたんです。

おじいさんが亡くなってからしばらく一人で暮らしていたんですけど、いつまでも一人でいるのはあぶないといわれて、都会に住む息子のところにやっかいになるようになりました。息子も、息子の嫁もとてもよくしてくれます。孫たちもとてもかわいいです。でも、こんな歳になって知らない土地にまいましたので、少し寂しいときもありました。一人暮らししてましたときは、好きなものを作っては食べて、ご近所にも知った人がたくさんいて、まあそれなりにやっておりました。こんなこというとばちがあたりますけど、ときどき、お嫁さんの作ってくれる食事ではなくて、自分で勝手に作って食べたい時もあるんです。出てこなければよかったと思うこともありますけど、いずれ^{めんどう}面倒をかけることになるのだから、とっていました。

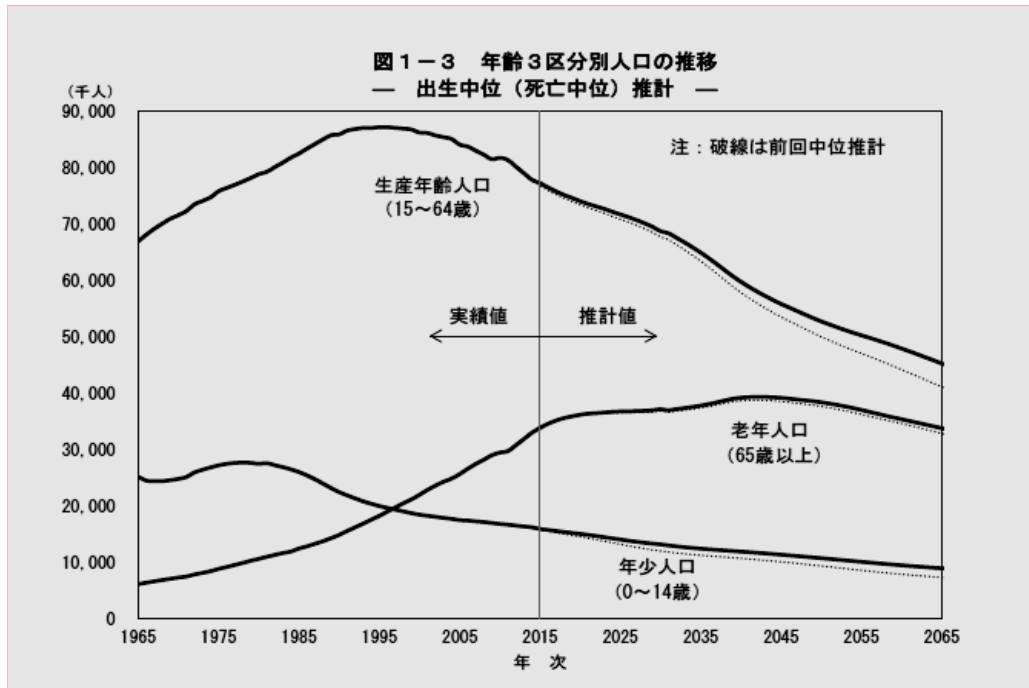
そんなときなんです、はじめて句会に出ましたのは。以前から、いさおさんの作品にはひかれておりましたが、はじめて参加した私に声をかけてくださって、とてもうれしかったんです。その後もいろいろとお世話になって、私はただお会いするだけでいいと思っていたんですが、今度の話になってしまいました。いさおさんって、不思議なんですよ。何でも自分でやってしまうし、男だからと威張りませんし、それに考え方がやわらかいんです。

まあ、いさおさんと結婚するかどうかは、まだわかりませんが、私も 70 を過ぎましたし、いつまでも可愛いおばあちゃんをやってられません！と、そんなことも考えておりますの。



対話の ために

- 「ひとりで暮らす高齢者」、あなたのイメージは？
- 寝たきりや認知症、また介護の問題について考えたことがありますか？
- 「いつまでも可愛いおばあちゃんをやってられません！」
というはるさんの気持ちについて、どう思いますか？



■日本の将来推計人口（平成29年推計）について

国立社会保障・人口問題研究所は、平成27（2015）年国勢調査の人口等基本集計結果、ならびに同年人口動態統計の確定数が公表されたことを踏まえ、これら最新実績値に基づいた新たな全国将来人口推計を実施し、その結果をとりまとめました。「老年（65歳以上）人口、および構成比の推移」として、次のように推計されています。

「老年人口は平成27（2015）年現在の3,387万人から、2020年には3,619万人に増加する。その後しばらくは穏やかな増加期となるが、2030年に3,716万人となった後、第二次ベビーブーム世代が老年人口に入った後の2042年に3,935万人でピークを迎える。その後は一貫した減少に転じ、2065年には3,381万人となる。老年人口割合を見ると、2015年現在の26.6%で4人に1人を上回る状況から、出生中位集計では、2036年に33.3%で3人に1人となり、2065年には38.4%、すなわち2.6人に1人が老年人口となる。」（『日本の将来推計人口（平成29年推計）』国立社会保障・人口問題研究所より）



【キーワード】

■ 要介護・要支援高齢者と認知症高齢者

「高齢社会白書」（平成29年、内閣府）によると、高齢者のいる世帯数は23,724千世帯と、全世帯（50,361千世帯）の47.1%を占めています。要介護者または要支援者と認定された65歳以上の高齢者は平成26（2014）年度末591.8万人で、平成15（2003）年度末から221.4万人増加しています。

また、65～74歳と75歳以上の被保険者について、それぞれ要支援、要介護の認定を受けた人の割合をみると、65～74歳で要支援の認定を受けた人は1.4%、要介護の認定を受けた人が3.0%であるのに対して、75歳以上では要支援の認定を受けた人は9.0%、要介護の認定を受けた人は23.5%となっており、75歳以上になると要介護の認定を受ける人の割合が大きく上昇します。

一方、同調査で平成24年度（2012）年度の認知症高齢者は462万人、65歳以上の高齢者の7人に1人（有病率15.0%）でしたが、2025年には約700万人、5人に1人になるとの推計もあります。

高齢者虐待

高齢者虐待は、高齢者自身が自分で訴えるだけの体力や知力が衰え、“世話をかけている”という意識から社会的に声をあげることが妨げていることから起こる場合が多いと言われています。平成 17 年、高齢者に対する虐待の防止、高齢者の擁護者に対する支援等に関する法律（高齢者虐待防止法）が制定されましたが、その後も虐待は増加し、平成 28 年の厚生労働省の調査によると、養介護施設従事者等の虐待判断件数が 452 件、高齢者の世話をしている家族、親族や同居人等による虐待判断件数は 16,384 件となっています。

虐待の発生要因として、養介護施設従事者等による場合は「教育・知識・介護技術等に関する問題」が 66.9% と最も高く、次いで「職員のストレスや感情コントロールの問題」が 24.1%、「倫理観や理念の欠如」（12.5%）が挙げられ、養護者による虐待の場合「養護者の介護疲れ・介護ストレス」が最も高く（27.4%）、次いで「虐待者の障害・疾病」が 21.3%、「経済的困窮（経済的問題）」が 14.8%となっています。

高齢者施策の充実

高齢者に対する福祉施策は、今日では高齢者の自立をめざしたものと変わってきました。社会経済状況の変化によるところも大きいですが、その内容は高齢者の人権を尊重した取り組みへと変わってきたものといえるでしょう。例えば、介護サービスの増大と多様化に対応するため、平成元(1989)年「ゴールドプラン」の策定以来、効率的・総合的な保健・医療・福祉サービスの提供を通じ、利用者本位の質の高いサービスの利用を可能にすることにより、高齢者の自立を支援することが重視されてきました。平成 12（2000）年には高齢者介護に対する社会的支援体制を整備するために介護保険法が施行されました。

以前に比べてはるかに長くなった高齢期を、高齢者個人が「多様な社会活動に参加する機会が保障され」「健やかで充実した生活を営むことができる」社会の構築が課題となっています。



からひろげていくと

エミさん(30 歳)は、現在、マイさん(28 歳)と暮らしています。エミさんは早いうちから女の子に惹かれていましたが、長い間、自分の気持ちを封じ込めていました。社会人になってから雑誌を通じて同性愛者のサークルを知り、そこで自分と同じように悩んできた女性たちに出会いました。「自分だけじゃなかったんだ」という^{あんどかん}安堵感。そして仲間との語らいの中で、同性愛も恋愛の自然なあり方の一つであることを実感していきました。エミさんは初めて、自分で自分を受け入れることができたのです。

そのサークルで出会ったマイさんと意気投合し、ほどなく一緒に暮らしはじめました。家事は「お互い得意なものをする。二人とも苦手なものは当番制」と決めています。「男女が恋愛・結婚するのが当たり前」という世間の圧力を感じつつも、今は好きな人と一緒に暮らせることの楽しさと幸せをかみしめています。エミさんはマイさんを大切な「家族」だと思っていますが、親や同僚にはまだ「友だち」と紹介しています。エミさんは、信頼できる人には少しずつ、自分たちのことを話していきたいと思っています。

